

「交わり」をつくるもの—牧師就任式を終えて—

丸山 勉

[聖書] マタイによる福音書 20章 1～16節

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするととは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたのではないか。自分の分を受け取って帰ちなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

[序] 牧師就任接手礼式礼拝の感謝

今日は8月の26日。昨日は**牧師就任接手礼式礼拝**をご一緒に捧げることが出来、本当に嬉しく思っています。昨日は大変にありがとうございました！ 昨日一日だけでも大変でしたのに、これまでの様々なご準備を心から感謝致します。同じ北関東の教会の皆様だけでなく、他教会の皆さまも多くご出席下さって、私自身はとても嬉しい反面、何おかしな気分も味わっていました。それは、私も一緒に「誰かの」牧師就任接手礼式礼拝に参加しているような気持ちを持ったのです。当事者意識が欠けている、と叱られそうですけれども、本当にそうだったのです。けれどもそれはもしかしたら当然なのかも知れないなと思いました。と言いますのは、作日の出来事は私が主人公ではないのです。全くそうではなく、**神様のみわざ**なのですね。神様がされていることの、私の思いを超えた不思議さに打たれていたと言うのが正しいのではないかと、思っています。

[1] 神様は川越教会に按手をしてくださった

昨日の式は、名前をよく見てみると「丸山勉牧師就任按手式感謝礼拝」となっています。一番大事な所は「感謝礼拝」という点です。皆で**神様に感謝を捧げる時**でした。そして、私が皆さんに祝福の中で按手を受けたという事は、私個人の事と言うよりも、私をも含めた「**川越教会への按手**」だと言ってよいのではないのでしょうか？

神様が、川越教会という**神の家族**、主イエスの福音のもとに**呼び集められた群れ**に対して、神様が手を置いて、「あなた方を今、**祝福**します。そして福音を伝える器として、あなた方を**新しく遣わします**」と言って下さった出来事なのではないかと思われています。

私自身は、昨日の式で**川越教会という「船」**に、腹を据えてと申しますか、正式に「同船」したという意識を持たされました。その上で申しますが、私は全くの新米牧師です。どうぞお支え下さい。これまでもそうでありましたように、祈って下さい。お願い致します。

今、「船」と申しましたけれども、キリスト教会の歴史は、昔から**教会のことを「船」にたとえて**きました。色々な意味があると思います。創世記の「**ノアの箱舟**」のイメージもありますでしょうし、**個々の教会は、大海原から本当に見れば、誠にちっぽけな船**だと思います。けれども、そんな小舟であったとしても、**その中心にいて下さるのがイエス様**なのですから、時に波に翻弄されながらも、その目指す所は明確です。**天の港**です。そこを目当てにして、船旅、曳航を続けているわけです。そして、同じ船に乗り、航海するとは、**運命を同じにして進んでいく**、という意味もあるのではないのでしょうか？ 飛行機もそうかもしれませんが、船はもっと「**時間の共有**」というものが、長くて深いのではないかと思います。

ですから**この船は「平和」に進んで**いかなければなりません。文字通り「ピース・ボート」であることが求められていると思います。そのために何が一番大切でしょうか。そのことを考えていた時に与えられたのが、先ほど読んで下さった**マタイ福音書 20章 1節以下**のイエス様のたとえ話です。

[2] 何に憤慨しているのか

このイエス様のたとえ話は分かりやすいものですが、腑に落ちない点があると思います。けれどもその所こそが大事です。それは、他の多くのたとえ話がそうであるように、**ここには神様からのチャレンジ**あるいは**問いかけ**があると思うのです。特に私自身が今回改めて読んで思わされたのは、「**共同体**」に対する**チャレンジ**があるのでは、ということです。神様に召された者同士が作る交わり、つまり「**教会**」**に対してのチャレンジ**です。

このたとえ話では、**夜明け頃から始まって、朝 9 時、昼の 12 時、昼過ぎの 3 時、**そしてもう日が沈もうとする**夕方 5 時**と、それぞれの時間から雇い主に見出され、その**同じぶどう園で働くようになった人々の集まり**を想像することが出来ます。私は、この「ぶどう園」こそ「**教会**」の姿なのではないか、と思わされたのです。

全員が同じ時間からこのぶどう園に招かれ、働くようになったのではないのです。働き始めた時刻がそれぞれちがいますから、一日の終わりまでの労働時間も当然異なります。初めの人と夕方からの人とは大分差があります。一番初めから雇われた人々に**約束された賃金は一デナリオン(一日分の生活費)**でした。しかし、彼らも途中からこのぶどう園に雇われて加わってきた者たちの存在も知っていたのだと思います。そうすると彼らは、自分たちが一番長く働いたのだから、後からここにきた者たちは、気の毒だが賃金は低いに違いない、と思ったことでしょう。

ところが意外にも、この雇い主は監督に命じて、まず、**一番遅い夕方から働き始めた者たちに、何と一デナリオン**を支払った、と言うのです。一番初めからこのぶどう園で働くようにされた者たちに約束した金額と**同額**です。ですから彼らは、私たちはもっと多く貰えるに相違ないと、内心期待を致しました。ところがこのたとえ話では**彼らに対しても同じ一デナリオン**であったこと、そして、そのことで彼らは憤慨した、ということが言われています。

この憤慨の理由は、ある意味、とても正当に聞こえて参ります。彼らは雇い主・主人にこう言いました。「**最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。**」

「私たちにはこのように言う事が出来る権利がある」ということですよ。自分が汗をかき、努力をしてきたことに自負を持つ者にとっては、**自分が認められていない**という残念な気持ちが湧いてくるという事なのでしょう。**数字**というものを、私たちは評価と直結して考える事に慣れてしています。聖書は、リアルだと思えます。けれども、次の主人の言葉が決定的に大事です。

[3] 「心」を持つ神様

「主人はその一人に答えた。『**友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。**』」

これは**革命的な言葉**です。まずこの前半の言葉は、**あなたの憤慨には根拠がない**と言っているのです。確かにその通りなのですね、「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。」この主人は約束通りのことをしたのであって、なぜそれが憤慨の理由になるのか？ と言う

のですね。そして次の言葉こそが、**そんな人間の思いをひっくり返す驚くべき神様の言葉、福音の言葉**なのだと思います。それは、実はとても単純なものでした。

「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。」

この雇い主には「心」があるのです。それは、それぞれの人間の姿、ありように、個別に心を動かされるそのような姿、これこそが、まことの神様の姿なのだよ、と聖書は私たちに突きつけているのです。その神様の思いはこういうものではないでしょうか。

「わたしは黙って人を放って置く事が出来ない。どのような者をもわたしのもとに招く。次々にぶどう園、すなわち信仰共同体である教会に送る。わたしは何の差別もしない。働きの成果で差別しない。性別、年齢、職業、健康か病気か、それは多様性であって、そのことで差別はしない。皆顔が違うように、それぞれが違うのは当たり前。ぶどう園の労働者の共通なことは、ただ一つ。それは、皆ある時に、わたしに呼ばれたということだ。」

私たちの**交わりを壊すもの**があるとすれば、それは暴力ではなく、**私たちの心**です。たとえ話の中にもありました。「**まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはいは。**」いつの間にか、自分をいっばしの人間であるかのように捉え、**誰かを見下げている**のです。そして自分を高めている。私自身も、これまでの信仰生活・教会生活の中で幾度**傲慢**な思いを抱いてきた事でしょうか。けれども、その**自分自身の出発点**を振り返ってみたいと思います。それは、この私も、この主人に見出され、ぶどう園に招かれなければ、「**何もしないで一日中ここ(広場)に立っている**」、**ただ虚しい生き方を毎日繰り返していたに違いない**、ということなのです。

その意味で、信仰者とは、皆同じ神様から呼ばれているという点で**同じ所**に立てる、**同じぶどう園で働く事ができるそのこと自体を、お互いの喜びとすることが出来る**のではないのでしょうか。

[4] 「計算」をしない生き方

私は最近、FEBCの仕事の関係で、千葉県にある知的障害(がい)者の社会福祉法人の施設の責任者の方のお話をお聞きする機会がありました。私自身はそのインタビュー番組の録音と編集担当ということで立ち合わせて頂きました。その施設の立ち上げの動機となったのは、実はその方のお嬢さんが知的な障害を抱えて生まれてきたことでした。そして、やがてこの子が成長し、大人になって行くことを考えた時に、その子の生活の事、仕事の事、また**自分たちが死んだ後もその子が生きていくことが出来る場所作り**をしたいと色々尽力されて、クリスチャンの友人の協力も得ながら今から15年前ほど前に、当初は「特定非営利活動法人」として「**めぐみの家**」という施設を設立したという事です。また、神様がなさる事は素晴らしく、そういうことから、やがてそのお母さん自身も**洗礼**を受けるようになりました。

重たい知的障害の子どもは、ある意味、こちらがどれだけ本気で関わっているかどうかを見破るような眼差しや「鋭さ」を持っている、ということがあるように思います。私たちはそういう方たちとの関わり方はなかなか難しさもあるのではないかと、思ってしまうのですけれども、このお母さん（つまり施設の責任者）は、意外な事をおっしゃいました。

「そういう障害を持つ方と接する時、むしろ、こちら側が**何も飾る必要がない**ということを知られます。とてもハッキリしていて**単純に受け止めてくれます**から、こちらが**何か媚(こ)びたりとか、よく思われたりしようとか、そんな計算をしなくていいからとても楽なのです**」と。

私はそのお話を聞いて、何か頭をガツンと打たれたような気が致しました。私たちはともすると「コミュニケーション能力」があるとかないとか言いながら、そこにはどこか**駆け引きの人間関係**が無いとは言い切れないと思います。それこそ**忖度(そんたく)**とか、**今相手を立てておけばのちのち損にはならない**とか、人間関係でもそんなソロバンを頭の中ではじいてしまうことがないでしょうか？

それ自体が「罪」ということではないのかもしれませんが、それはどこか**相手を立てているよう**でいて**自分ファースト**になっているような落とし穴、**罪の温床**になり得ることではないかと思えます。

このたとえ話の**早朝から働いている者は、真っ先に素晴らしい恵みに与っている**のです。虚しく時を過ごした時間はわずかで、主人である神様の声を受け止めて、長い時間働くことが出来たのですから。けれども、それがいつの間にか「**私の誇り**」になってしまった。言い換えれば、**神様の憐れみの心を見失ってしまった**、ということだと思います。」

[5]「最後の者にも払ってやりたい」

その早朝から働いた者に対して、**もう一度神様の心を気付かせるために**語られた言葉が、たとえ話の最後の部分です。14-15 節です。

「**自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。**」

「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか」と言うのですね。この主人が「**したいこと**」とは何でしょうか？ ——「**この最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたい**」ということでしょう。「5時から働いた者」ではなく「**この最後の者**」と言うのです。イエス様は敢えてこのように言われたような気がしてなりません。この人は文字通り「**最後の者**」だったのでないか。日**が落ちようとする最後の最後まで**、一主の再臨の日の直前まで—この主人(神様)は招く事を止めないお方なのです。

そして、「あなたと同じように支払ってやりたい」と言います。そうです、この主人は**“支払って”下さったのです**。私たちの**罪の代価**です！ **十字架に、ご自分の独り子を全きいけにえとして、お献げ下さったのです**。「この者にも、あなたと同じように支払ってやりたい」。ここでこそ、**ここでだけ、教会の交わりは創られる**のではないのでしょうか？ キリストのいのちはあなたのもの、そしてそれは、またあの人のもので、「それを受け取って帰りなさい」と仰るのです。

【結】 招き続けている神様

神様の愛は、私たちが**単純**にしてくれます。**思いを一つ**にしてくれます。またそれは**「敵意」という隔ての壁を取り壊すもの**だとエフェソ書は書いています（エフェソ 4:2）。誰でもOK、いつでもOK、神様は招き続けています。クリスチャンに対してもです。いつでも新しく立ち返ることができるために。

私たちの教会も、**「十字架」という途方もない神様の愛の贈り物をいつも新しく日曜日ごとに仰ぎながら、また、その愛に支えられながら、この地上にあって神の国の喜び**を分かち合っていく群れでありたいと思います。ゴールはイエス様によって約束されているのです。その**「天の港」**を望み見ながら、**お互い「一デナリオン」を与えられている事**を感謝しながら、船旅を進んでいきましょう。

お祈りを致します。